# 勇者って一人じゃないんですか？

Kelten

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者って一人じゃないんですか？

【Ｎコード】
Ｎ１１５７Ｙ

【作者名】
Ｋｅｌｔｅｎ

【あらすじ】
ドラゴンクエストの世界に勇者は一人しかいないのか？
ラダトーム城の兵士（転生者）は勇者の物語に深く関わっていく。

## プロローグ

「勇者って一人じゃないんですか？」

ラダトーム城の謁見室に俺の素朴な質問が響いた。

人間は理解しあえるんだ。うん、今理解できた。だってみんな目が言ってる。

（お前はだまれ！）

そして俺は勇者５人の謁見が終わるまで黙って立っていた。

―――――――――――――――――――――――――――――

俺の名前はケルテン　ラダトーム王家国務大臣付き特務隊士である。まだ新任の為任務が何なのか知らないが権限だけはすごい。王様と国務大臣以外の命令を拒否できるうえ、城の中に立ち入れない場所はほとんどない。

俺がこの世界がアレフガルドと認識したのは１０年前、何の脈絡もなくこの世界がドラゴンクエストの世界だと認識した。平和な時代で４００年ほど前に大魔王が現れロトの勇者が退治したという伝説がある。つまり近い未来に竜王が現れる。そう理解した俺はそれに備え自らを鍛えた。そう自分を育ててくれた湖上都市リムルダー

ルを守れるぐらいに。で何の因果かラダトーム城で兵士をやっている。しかも勇者の謁見とはこの物語の最高の見せ場だと張り切っていた。

　ちなみに俺の位置は下の通り特等席である。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

近衛隊長　近衛　近衛　近衛

王様　勇者

国務大臣　俺　近衛　近衛

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

# プロローグ（後書き）

見切り発車

## 準備

時は5時間ほど前に遡る。

ラダトーム城兵士宿舎　食堂

俺はいつも朝のトレーニングの後食事をする。
食事の後は王室図書館にて史書を漁り、知識を貯める。
昼からは新任の挨拶周りをするのがここ一ヶ月の日課だ。

でも今日は違った。食事の最中、近衛のサイモンがやってきた。

「おっいたいた。お前昼からの謁見に立てって命令だ。大臣からの伝言な。」

こいつは不良近衛騎士のサイモン。見た目は金髪碧眼で美形、さらに貴族の三男坊のくせに少し残念なやつだ。一度俺と衝突してから俺お前の仲だ。

「おい、なんか失礼なこと考えていないか？」

「あれっ顔にでてたか。で、王様への謁見は近衛騎士が立つのが決まりじゃないのか？」

「お前なあ。まあいい、今日は勇者の謁見だからな。大臣の隣につけよ。」

「とうとう勇者のお出ましか。いや光栄なことだな。」

「そうか？まっ人それぞれだからな。昼の謁見１５分前に控え室に集合な、典礼用の装備で。」

「まじか！典礼用装備。あれ嫌いなんだけど。」

典礼用装備。鉄の鎧、鉄の槍、鉄の盾、腰に鉄の剣のフル装備で総重量２０ｋｇ以上、しかも無駄に豪華な作りをしている。

「俺は好きだけどな。いかにも騎士って感じだろ。」

「お前はムキムキだからな。俺みたいな軽装備にはきつい。」

「どうせ立っているだけだ。じゃまた後でな。」

他人事だと思って勝手なこと言う。俺の戦闘スタイルは革鎧に両片手刀で魔法の併用だ。しょうがないから今日はいいとして、次の為に典礼用の革鎧を用意するよう大臣に頼もうかな。

## おお勇者ロトの志を継ぎし者よ

「勇者ガルドどの、ご入場」

謁見室に勇者の入場を告げる声が響き、黒髪短髪、身長２m弱、ごつい体の男が入ってくる。しずしずと歩み寄り王座の手前で片膝をつく。

「勇者ガルド、まかりこしました。」

ブラボー！！！なんて感動的なシーンだ。俺はこの場にあることを精霊ルビスに感謝する。

「おお勇者ロトの志を継ぎし者よ、よくぞ来てくれた。」

あれ？なんかセリフがおかしいぞ。志？　血じゃないの？

「今アレフガルドは、竜王によって光を奪われ絶望の下にある。そなたがまことの勇者なら竜王を倒し光の玉を取り戻してくれ。なお勇者への支援に関しては大臣より仔細説明をうけよ」

俺の横で大臣が一歩前にでて説明を始めた。

「今ラダトーム王家ラルス１６世の名において勇者ガルドとの契約が成された。

一つ、ラダトーム王家は準備金として１００ゴールドを勇者に与える。

一つ、ラダトーム王家は勇者の生命に対しできる限りの支援を行なう。なお血の契約において生命失　　　われしときでも蘇生が可能である。
一つ、勇者はラダトーム王家御用達の宿屋、武器屋、道具屋において割引サービスを受けることがで　　　きる。
一つ、勇者は王家準騎士として扱う。なお装備品として同等のものを所持する権利も与えられる。

一つ、勇者が獲得したモンスター素材は王家が専属で買い上げる。

一つ、・・・・・・・・・・・・

（なんだこれ？いやに生々しい契約だな。血の契約ってなんだ？割引サービス？買取？俺は混乱しているようだ。まだ大臣が何か言っているようだが何も聞こえない。というか聞きたくない。あ～　あ～　何も聞～こ～え～な～い～）

ふと我にかえると勇者が大臣の差し出した紙に血判を押している。

「最後に王は公人ゆえに口にできぬが、さらわれし王女ローラの命を案じて折られる。もしそなたが姫を助けてきたならば、臣下にして最高の恩賞が与えられるであろう。では行くがよい勇者ガルドよ」

そして勇者が退出していく。なんと言うか想像していたのとは違うが儀式は終わった。と思った。

「では次の勇者を入れよ」

「勇者ドゥーマンどの、ご入場」

で冒頭の一言「勇者って一人じゃないんですか？」

## 勇者支援官　兼　査察官って何？

今俺の前で大臣が怒って怒鳴っている。

「もう少しで台無しになるところだったのだぞ、次の勇者の耳に入らなかったからよかったものを。」

「まあまあ大臣殿、ケルテンも知らずに口に下までのことだし、大事には至らなかったのですからよろしいではないですか。」

「私が怒っているのは知らなかったことではないですよ、近衛隊長殿。そなたの部下が十分な説明をしなかったことに腹をたてているのです。部下の教育は正しく行なっていただきたいものですな。」

（うへっ！怒りの矛先がかわった。近衛隊長もサイモンも小さくなってる。）

「いえね、大臣。俺は知らなかったのですよ、ケルテンが知らないことをね。てっきりすでに大臣が説明しているものだと・・・。」

大臣は苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「もうよい！では改めて説明しよう。ケルテン何か質問はあるかね。」

「はい、では質問させて頂きます。勇者は唯一人、しかもロトの血を引くものではないのですか。そう理解しているつもりでしたが？」

「なるほどよく勉強しているな。勇者ロトの伝説とロトの預言書か。

」

ここ一月の間王立図書館で調べた中の公文書にあったのがロトの伝説とロトの預言書だ。俺の知っている事実といくらか異なるが大筋であってる。さらに国内にある無責任な噂（結果的には正しいのだが）を利用して半年前にラダトーム王家が国中に布告をだした。

勇者ロトの伝説：およそ４００年前、アレフガルドを絶望に落とした大魔王がいた。この災難に対してラダトーム王家は異世界から勇者を召喚しこれを討伐させた。

ロトの預言書：大魔王は死に際して言い残した。我死すともいずれ第二の魔王が現れるであろう。

国民の噂：ロトの勇者の血を引きし新たなる勇者が現れ、この国を助けてくれるだろう。

ここ一月の間王立図書館で調べた中の公文書にあったのがロトの伝説とロトの預言書だ。俺の知っている事実といくらか異なるが大筋であってる。さらに国内にある無責任な噂（結果的には正しいのだが）を利用して半年前にラダトーム王家が国中に布告をだした。

『この国難に王家は勇者を公募する。我と思わん者はラダトーム城まで出でよ。』

（俺が知っている答えと現実の情報は大臣のそれと一致する。では何が違うのか？）

「そう怪訝な顔をするな。概ね正しいが問題がある。まず第一にもしロトの血に連なる者が現れても証明するすべがない。そしてその

者が必ずしも竜王を討伐できるとは限らない。」

「では偽者かもしれない者を勇者として招き入れているということですか？」

「そうだ。だが一人一人にはお前こそロトの勇者として招き入れているのだ。だが何人の勇者が現れようと一向に構わぬ、そのうちの一人が目的を達成すればよい！」

いや、そこでキリッってどや顔されても困るんですが・・・。

「しかしそれでは泥棒に金をやるようなものではないですか？」

「だからお前がいるのだ。」

えっ！俺となんの関係があるんだよ。

「そこでだ。改めてお前に任務を与える。ラダトーム王家国務大臣付き特務隊士　勇者支援官　兼　査察官だ。」

## 勇者システムの実情

「ラダトーム王家国務大臣付き特務隊士　勇者支援官　兼　査察官？」

「そうだ。お前には今日謁見した勇者5人を担当してもらう。まず支援だが、勇者への助言、救助、レベル管理を主にする。」

「レベル？」

実のところ、この世界では敵を倒してもレベルが上がって強くなったりしない。地道な訓練と経験、素質でしか強くなれない。だからレベルなんてないのだが？

「うむ。各々の勇者の持ち込む素材によってレベルを決める。簡単に言えば倒したモンスターの証明だ。このレベルに応じてどの程度のことが可能か助言するがよい。詳しいレベル管理については素材買取所の者に聞くがよい。」

なるほど。スライムの素材をいくつか持ってきたら、次にスライムベス、ドラキー・・・と強いモンスターと戦わせればいいのか。これが経験値で、買取でゴールドを与える。つじつまはあうな。

「そして一番大変と思われるのが救助だ。もしなんらかの理由で勇者が行動不能もしくは死亡した場合、速やかに現地に行って救助するのだ。尚、死亡していた場合したいが残っておれば王家に伝わる秘術によって蘇生が可能だ。この任務ゆえにお前が特務隊士に抜擢されたと言っても過言ではない。」

どういうことだ。それだけなら近衛の連中でもできるような気もするが・・・？

「お前の疑問はわかる。この任務に大事なのは強さはもちろんのこと、魔法が不可欠だ。その中でもルーラ、ベホイミが最も重要になる。救助に行ったはいいが戻ってこれないのでは意味がないからな。現状ではそこまでの魔法が使える者で腕の立つものは少ない。残念ながら近衛でも隊長と副隊長ぐらいしかいないのだ。ケルテン、お前は全ての魔法を会得していたな。」

「ええ使えますよ、全てをね。」

「ならば勇者を救助後、ベホイミによる回復やルーラでの帰還を行なうのだ。」

「しかし勇者の行動不能、死亡、現在位置などは張り付いていなければわからないのでは？」

「その点は問題ない。私の執務室の壁にある世界地図があるな。あれで仔細がわかるようになっておる。それを含めての血の契約だ。」

「なるほど、そのような魔法があるとは知りませんでした。」

「これも王家の秘術よ。知らぬのも無理はない。それはともかくもう一つの任務だが、勇者として力量が足りぬ者、器量が足りぬ者がいたならば、査察官として解任する権限を与える。なお口頭による宣言だけでなく説得も必要だ。ちなみに先月までに旅立った勇者は２０名だが現在残っているものは５名しかおらぬ。」

「ちなみに力量や器量の基準はどういったもので？」

「それはお前に一任する。解任される者が納得いかぬ場合もあろうが説得の方法も一任する。」

「え～とっ、それは私の気分でやめさせることができて、さらに気に入らないやつはぶん殴ってでもやめさせろってことですよね！」

「そうだ。察しがいいではないか。ちなみに先月までに旅立った勇者は２０名だが現在残っているものは５名しかおらぬ。お前以外に２名の特務隊士が同じく任務についておるが大体実力行使が必要だったらしいぞ。まあお前は近衛隊長と互角に戦えると聞く。せいぜいがんばるがよい。」

ちょ、だれがそんなこと言った。大臣の隣で近衛隊長とサイモンがニヤニヤしている。お前らか。

「いえ、近衛隊長には一方的に負けています。」

「あの勝負は私の方が一方的に有利なルールの元行なわれたもので謙遜することはない。お前を推挙した私の顔もたててくれ。がっはっはっ！」

近衛隊長が腕を組んで笑っている。隣のサイモンがサムズアップしている。何がグッ！だ。あとで締める。

「それにこれはもう決定事項だ。快く拝命せよ。」

「はあ、わかりました。特務隊士ケルテン　勇者支援官兼査察官拝命いたします。」

腹が立つので嫌味たらしく片膝を付き、右手を心臓の前に沿える最敬礼で答えてやる。

「よい。任務に励め。」

くそっまるで嫌味が効かない。さすが国王の実弟で王位継承権２位だけはある。これだから高貴な生まれな方は困る。

「最後にもう一つある。もし今夜にでも城下で女を侍らせて酒宴に興じておる不届き者がいたら、即解任、さらに５００Ｇの罰金をさせよ。罪状は国王様への詐欺罪だ。これで国庫への負担はほぼ無くなる。」

うわっなんて悪辣な。５人のうち一人くらいそんなやつはいるだろう。準備金１００Ｇは高くないってわけだ。しかし素直に聞くはずもないから、全ての厄介事を俺に押し付ける腹だ。

「そう嫌な顔をするな。今までおよそ半数がそれで脱落しておる。無条件でお金や名誉がもらえると思っておる輩は少なくないぞ。」

「わかりました。もういいです。せいぜいがんばりますよ。」

おれは重装備を引きずるように退室した。

## 考察：魔法とステータス

部屋に戻った俺は重い装備を所定の木人形にかけていく。典礼用の装備は細部は結構華奢にできているので装備しないときは部屋の隅の木人形にて片付けておかないといけない。そこにやにやしたサイモンが入ってくる。

「よっおつかれ！さっきは悪かったな。」

「そう思うなら手伝え。片付けるのも手間だ。自分に着せるより面倒くさい。」

「了解。しかしそんなに重いのが嫌なら魔法使い用の正装でよかったんじゃね？」

「ああ、それも考えてはみたんだがある理由があって止めた。」

サイモンが手を止めて聞き返す。

「ある理由とは？」

「さぼるなよ。まあ大した理由じゃないが、まず魔法使いの地位が低い。」

「そうか？おれはすごいと思うけどな。ベギラマとかベホイミとか俺には使えないからな。」

この時代の魔法は過去のロト一行が使用していた魔法に較べてかなり劣る。物語のはじめの作品とかそういう問題だけでは解決でき

ない理由が実際にはあるはずだ。そう思って過去の文献等調べたのはもう5年ほど前からか、今ではそれでとんでもない量の報告書が書ける。ただ報告する義務もないし、唯一の俺のアドバンテージを知られるのも困る。そう俺は全ての魔法が使える。ベギラマではなくベギラゴン、ベホイミでなくベホマ、それ以外の全ての魔法すらアレフガルド中を旅して発掘、解読、会得している。そういった理由を踏まえてこの時代の魔法使いは地位が低いと理解している。

「そういうがベギラマの一撃と君らの剣の一撃、与えるダメージは大差ない。ならばＭＰを消費しない剣の方が強い。またベホイミで回復できる量もそれと大差ない。かつてのロトの時代の大地を焼き払い、天より雷を落とし、死人すら蘇らせる魔法が使えるわけではないからな。」

俺は嘘をつく。使える魔法を使えないふりをする。この強大な魔法を公表したくない。これは多分ロトの勇者の決定と違わないと思う。戦乱の時代には究極の武器になるかもしれないが平和の時代には強力な暴力となる。またもし竜王側が使えるようになると互いの使用する魔法は被害を拡大するであろうことは想像に難くない。

「ふ～ん、そんなものか？お前は学者みたいなことを言うんだな。でもよお、そんな強力な魔法が使えたら竜王軍もいちころじゃね？」

気軽に言ってくれる。物を簡単に考えすぎる。こいつは剣の力量は近衛でも上の方、魔法も簡単なホイミ、ギラ程度なら使用できるが双方を別物として考えることしかできない。もっとも片手剣と盾を使用する戦闘スタイルでは魔法は使いづらい。どちらかの手を空けないと魔法を発動できないから戦闘開始にギラ、ベギラマを放ち、戦闘終了後に回復を行なうのが一般的である。

「もしの話はいい。しかし懐かしい称号だ。ここの兵士になるまで戦う学者って言われてた。」

「一日の半分は図書館にいるお前らしいいい称号だ。よしできた。」

サイモンが最後のパーツを木人形に取り付け終わった。

「サンキュ。でさっきの話だが魔法使いのローブ姿は動きづらいから嫌だ。第一格好よくない。」

「プッ。クックック！やっぱりお前は面白いな。好きにするがいいさ、俺じゃねえし。」

「あきれたやつだな。よく近衛騎士になれたなお前？」

俺は肩をすくめて言う。近衛にあるまじき軽さだ。

「俺もそう思うよ。先の戦いで兄貴が死ななかったら間違いなく貴族の次男坊って気軽な身分でいれただろうよ。だれにとってかは知らんが迷惑な話だ。」

「お前が言うな！」

文句を言いながら革の服を着る。自作の特別製で動きやすく軽い。必要な場所だけ金属板で補強してある。篭手も脛当ても同様だ。最後にこれもマイラの鍛冶に作らせた特別製の刀を佩く。刀を作る技術は廃れていたが代々伝わっている秘伝書を解読して作ってもらった。それから更なる改良を重ねて今ではお気に入りの一刀だ。力の強くない俺には使いやすい装備である。

ここからは俺なりのステータスの考察である。

ちなみにステータスは確認できない。もちろんステータス確認画面なんか出てこない。他人と手合わせしたりして相対的に理解できるぐらいであるが俺、サイモン、近衛隊長の身体能力は次の通りである。

| | 俺 | サイモン | 近衛隊長 |
|---|---|---|---|
| 力 | C | B＋ | A |
| すばやさ | B | C＋ | B |
| 賢さ | A | D | C |
| HP | C＋ | A－ | A |
| MP | B－ | D | C |

記号は俺評価で、Aは数値にすると201～250　B151～200　C101～150　D51～100　E1～50で、数値の＋はふり幅の上、－が下と考えている。例外の数字としてSの250～255、Fの0（無）としている。Sはお目にかかったことはないがFは純粋な戦士のMPに該当する。

俺に較べて隊長の化け物具合がわかると思うが、サイモンも十分強い。しかもまだ伸びしろがある辺りに空恐ろしさを感じる。力のCというのは鉄の装備ができるぎりぎりの域である。ただし装備するとすばやさが犠牲になる。ゆえに俺は標準戦闘スタイルは捨てた。それでも普通に戦えば隊長には勝てない。多分サイモン相手でも5割勝てればいい方である。

次に賢さだが俺のAは転生ゆえの知識が上乗せされている。総合すると魔法使いか盗賊推奨のステータスだ。賢さはDあれば下級の魔法が使用できる。Cもあれば中級魔法、つまりこの時代の全ての魔法が使用できる。だからこの時代に賢さB以上は棄てステータス

になる。魔法はワンワードスペルではなく詠唱（発音必須ではない）方式で、理解できない詠唱を丸覚えで使用している。簡単に言うとギラといえば火の玉がでるわけでなく、口頭か頭の中で詠唱してラストワードとしてギラと唱える必要がある。実際はもっと難しくＭＰの消費、マナとの融合などの基本があるのだがここは割愛する。

総合して俺は隊長に勝てるかというと普通は無理だ。だが俺にしかできない魔法を使用すると可能になる。答えは能力上昇系魔法の使用、具体的にはピオリム（すばやさを元の値の０．２５倍上昇する）を２回かける。すばやさＢ：約１７０はすばやさＳ：２５５に化ける。他にはバイキルトやスカラの使用も有効である。騎士同士の試合は双方構えてからの戦いなので魔法を使用する時間はいくらでもある。かくして俺はそれなりの強さを認められている。

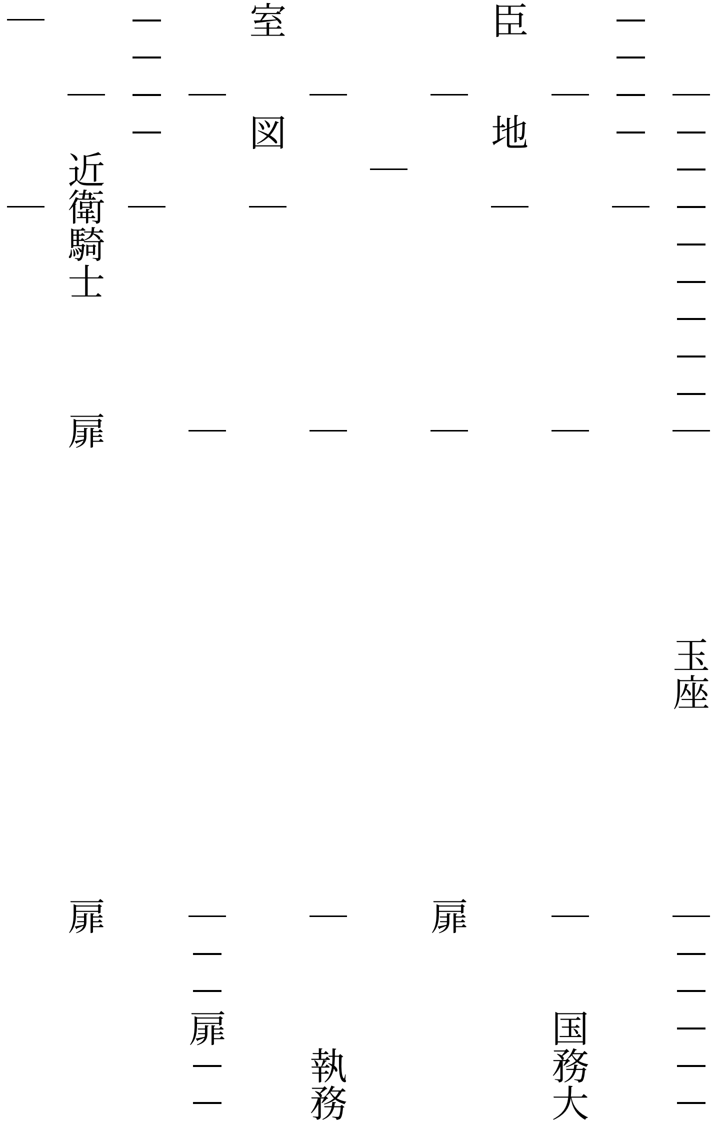
## 大臣室の地図

「よし準備完了。愉快な任務じゃないが行って来る。」

「おう、がんばれよ。応援しているぞ。」

「なんかお前に応援されると、馬鹿にされてる気がする。」

とりあえず今日の勇者５人の詳細と居場所を確認する為に大臣の執務室に向かうことにする。執務室へ行くには城の一階奥の二回への階段を上る。ここには常時二名の兵士が詰めている。もちろん俺は顔パスだ。他には大臣、近衛騎士なども顔パスだ。二階に上ると近衛の詰め所がある。反対側が大臣ら文官の執務室にである。ちなみに中央に謁見室があり、その裏側が王様らのパーソナルスペースになっていて、立ち入りは大臣と近衛隊長以外は許されていない。



扉
———
—
—詰所—————扉扉——————
——————
———扉
——
———扉扉
—
—扉——————
——
—扉階段1F↓—
——
———————————————————————————————
——

二階は礼式がとても面倒くさい。ほとんどの扉の前に近衛騎士が立っていて入室の理由を説明しなくてはいけない。それらの障害を乗り越えて大臣の部屋に入る。部屋の中には何人かの文官がいたが大臣によって退室させられていく。俺を睨んで退室していくのは簡便して頂きたい。

「お邪魔でしたか？ずいぶんと仕事が立て込んでいるようですが？」

「かまわん。今この城で最優先の仕事は竜王と勇者に他ならん。」

「そうですか。ではその勇者ですが・・・。」

俺は地図を眺めながら声をかける。地図にはアレフガルドの簡単な地形といくつかの光点が見える。手前の台には水晶球が紫色の座布団の上に鎮座している。大臣は抽斗から書類を取りだすと、一枚

の書類の上に右手を水晶球に左手をかざす。すると一つの光点が強く光り水晶球に見知らぬ男達の姿が映った。

「見よ。これが血の契約の効果の一つだ。この契約書の人間をこちらの遠見の球に移すことができる。少量のＭＰを消費するが便利なものだ。」

「これはだれですか？」

「これは勇者１２とその一行だ。固有名詞は書類にある通りだ。」

書類にはエイブラムとある。固有名詞で呼べばいいのに。勇者１２ってひどくね？

「先も述べたが勇者が何人いようとかまわぬ。同じくそれが誰でも一向に構わぬ。現在いる勇者は１２、２５、４１、４２、４３そして今月の５１、５２，５３，５４，５５の十名だ。」

なるほど数字の前が謁見した月、後ろが謁見順か。

「なるほど一月、二月が一名ずつ三月は全滅で四月は豊作ってことですか。」

「ふん。だれがどうでもかまわん。お前は自分の担当勇者のみ気にすればよい。」

うわっ！一気に機嫌が悪くなった。やっぱ王族だ、下々のことなど気にも留めぬか。

「わかりました。では調べさせていただきます。今月の勇者はこの

５枚ですね。」

勇者５１　マイラ出身ガルド　大斧の使い手　嗚呼あのごついやつか。現在位置はと・・・水晶球に手を当て魔力を送り込む。もう城外にいるようだな・・・とりあえず問題なし。

勇者５２　ラダトーム出身ドォーマン　うっ記憶にない。居場所は・・・城下で同行者２名か。

勇者５３　ラダトーム出身クロウ　またしても全く記憶にない。こいつも城下で同行者２名っと。

勇者５４　ラダトーム出身ゲオルグ　やっぱり記憶にない。完全に意識が無かったようだ。反省せねば・・・　こいつも同行者２名？ちょっと映像を拡大・・・なるほど、こいつら三名はいっしょか。もしかするとあかんかも？

勇者５５　出身地不明アレフ　１５歳　若いな。まっ１８の俺が偉そうに言うことでもないか。ふむ居場所は城下町。ただし一人・・・。

最悪今日一日で４人解任しなくてはならないか。う～ん、我がことながら大変だな。

「大体わかりました。でも本当にいいんですか？５００Ｇとっても。」

「かまわん。我々王族に対して詐欺を行なったのだ。死刑でもかまわないぐらいだ。」

やべっ触れてはならないところに触れたようだ。とばっちりが来ないうちに退室することにしよう。

## 城下町の宿屋

城下町にやってまいりました。当たり前といえば当たり前だが、？の離れた所にある町ではなく同じ城壁内にある？、？のタイプである。この城下町はとても大きく公称の人口で１０万人、竜王出現後は集落を失った民が流れ込んでいて２０万人とも言われている。１０万人といえば多く感じられるかもしれないが、通常兵士一人を維持するには千人の民が必要といわれている。このぐらいの人口がなければ騎士団は維持できない。ちなみに各地の人口はマイラの村５０００人、地下の町ガライ８０００人、湖上都市リムルダール２００００人、砂漠都市ドムドーラ３００００人（現在不明）、城塞都市メルキド５００００人とされており、またそれ以外にも小集落が多数あった。過去形なのが残念である。リムルダール、ドムドーラ、メルキドはラダトームに多額の税金を払うことで一応の自治を許されている。

さてさっきの勇者達の光点の位置はたしか王家御用達の宿屋の辺りだが・・・なんだ俺が使っていた定宿じゃないか。この宿は俺も結構世話になってたし挨拶ぐらいしておくか。しかしここの宿代は５０Ｇほどだったと覚えているが、もしかして勇者割引で８Ｇとかになるとか言わないよな。としょうもないことを考えながら宿屋に入る。人の良さそうな親父がこちらを確認する。

「久しぶりです。親父さん。」

「おお学者か？城への任官はどうなった。一月も音沙汰無しで心配したぞ。」

「すみません。かなり忙しかったもので。」

心底うれしそうな親父さんがボトルを取り出しながら言う。
「ということは無事任官できたんだな。それはめでたい。今日は奢らせてもらうよ。」
「いやゴメン。まだ任務中なんでそれはまた今度で。」
「ふ～ん。まだ仕事ってどこに配属された？お前の腕なら一般兵ってことはなかろう。」
「うん。知らないかも知れないけど国務大臣付き特務隊士。」
その名を聞いて親父さんの顔が曇る。その表情からは心配そうな感情と嫌悪が感じられる。あまりいいイメージがないようだ。俺の顔色を見て親父さんの顔が元に戻った。
「嗚呼その任務自体は問題ない。まあできれば補助金の金額をもう少し上げてもらえると助かるが・・・。いや今のは忘れてくれ。」
？？？。なんか都合の悪いことでもあるのか？
「特務隊士なら勇者の視察だな。五月の勇者が四人ほどチェックインしてる。内三人の態度が以上に悪い。女の従業員に手出すは、部屋にけち付けるはで散々だ。全くあんな安い金でＶＩＰ扱いしろって冗談じゃない。　　ああ城批判じゃないからな。念のためな。」
はあ。補助金も大した額ではないようだ。気の毒でしょうがない。しかしまあやっぱあの三人は駄目なようだ。気が滅入るな。

「そうですか。で、そいつらはどこですか？」
「さっき出て行った。ただで飲ませてやる酒はないって言ったら椅子蹴飛ばして出て行ったよ。」
「じゃあ。待たせてもらうよ。水もらえる？」
俺はカウンターに腰をかけた。親父がグラスに水をいれてよこす。
「水だけでなく何か食べていってくれよ。結構もらってるんだろ？」
「残念ながら初任給は四日後だ。しばらく我慢だ。それとこれから荒事になりそうなんだ。あまり腹を膨らませるわけにはいかない。」
「そうか？契約金とかあるはずじゃないか？」
「嫌なこと思い出させるね。契約金は推薦者のリムルダールの義父のものだよ。」
「お前の義父って、確かあの町長だよな。」
「そっ、全部税金だよ。去年は竜王のせいで十分な税金が集まらなかったらしい。なにが城で見識を深めて来いだよ。俺は売られたんだよ。」
「しょうがないさ。城の取立ては結構きびしいらしいぜ。お前さんの義父も苦労してるのさ。」
「わかってるよ。別に恨んだりしてないさ。ただ文句の一つくらい

言ってもいいだろ！」

自治権との引き換えの税金が各都市にある。これはその年の取れ高を考慮したりしない。だからお金や物で納められない場合は人で払う場合がある。その場合町で優秀な人材を城に推挙し契約金という形で納めたことにするのである。前例では近衛騎士になった者は数えるほどしかいないらしい。それでも一万Ｇだったらしいから、俺の１０万Ｇは破格だ。リムルダール町長と近衛隊長の推薦を聞いた大臣の顔は見ものだったらしい。まあ栄転ということで喜んでいる人が大多数だし、王立図書館の閲覧ができるようになった俺はその言葉どおり見識を深めることができてご満悦である。

宿屋の入り口の扉が音をたてて誰か入ってくる。若いというより幼さの残る顔をしている。見覚えがある。たしか勇者５５、ああ駄目だ駄目だ、番号で呼ぶのは頭の中といえ失礼だ。え～とアレフだ。

「只今戻りました。食事をお願いしたいのですがお金が少ないので一番安いので。」

「わかった。食事はどこへもっていけばよい。ここか？部屋か？」

「ここでお願いします。」

やけに低姿勢だな。まあ威張り腐っているよりは十倍はましだ。銅の剣、革の盾、皮の鎧。鎧が真新しいということは買い替えたのか。俺が勇者アレフを見定めていると俺の隣で直立した。

「先程謁見室でお会いしましたね。勇者アレフです。多分これからお世話になると思います。よろしくおねがいします。」

驚いた。俺は覚えていないのに俺を覚えている。（うそ。俺は呆けていただけ。）

「おっおう。俺は勇者支援官のケルテンという。こちらこそよろしく。」

「王様にお礼を伝えてください。鎧を買い換えることができました。」

なんか雰囲気に飲まれて敗北感でいっぱいである。謙虚さでも人は押されることあるんだな。

「ええ、必ず伝えますよ。君も頑張って下さい。」

「もう挨拶はいいだろう。さあ食事だ。食べて英気を養いな。」

宿屋の親父さんが食事をテーブルに並べる。結構な量だ。

「あの私が頼んだのは一番安い食事でしたが・・・？」

「いいんだ。若いんだ、たくさん食べて強くなってもらわないとな。勇者さまだろ。」

「そうだそうだ頂いておけ。城から補助金もでているしな。なっ親父！」

補助金の話でまた親父の顔が少し曇る。一瞬の間の後俺と親父は大爆笑する。アレフはあっけにとられている。不愉快なことだらけの今日一日だったがこいつに会えてよかった気がする。

## 衝突

ドーン！

宿屋のとびらが乱暴に開く。せっかくのいい気分が台無しだ。同じく親父もアレフも嫌な顔をしている。

「おらっ勇者様のお帰りだぁ～。」

女の肩を抱いた酔っ払い三人が入ってくる。反対の手には酒瓶。テーブル席のあたりを占拠すると酒盛りを始める。先程確認した装備と全く変わってない。同行している女は安っぽい香水の匂いにあからさまな露出度の高い服、いかにもな娼婦だ。さてどうしたものかな？どの程度から詐欺罪って申告できたかな？

「ねえ、いっつもお金がないって言ってたのに今日はどうしちゃったのぉ～？」

「そうよ！いつも冷やかしばっかだったのにぃ。」

「そりゃ言えねえな。お金はあるところからもらえばいいんだよ。げっひゃっひゃっひゃ～！」

「何よそれ。教えなさいよ。教えてくれなきゃ帰る～。」

「そうよ。あんた達だけず～る～い～。」

完全にできあがってるな。もう少し泳がせたら全部しゃべってくれないかな。娼婦頑張れ！今お前達は優秀な検察官だ。

「誰にも言うなよ。秘密だぞ。秘密だからな。絶対言うなよ！」

「うん絶対言わない。私達の秘密ね。」

もう一息だな。まるでトリオのお笑い芸人のようだ。

「じゃあ言うぞ。実はな、城に行ってなにを隠そう私がロトの末裔です。ってやってやった。」

「え～！三人とも～。それってなんか変じゃない。」

「細けーことはいいんだよ。それでとりあえず１００Ｇもらえたんだからよ。あとはスライムなりいじめてもっと金もらってくるからよ！」

おいおい。スライムは一匹で１Ｇにしかならんぞ。いや突っ込む所が違うな。はい言質とりました。さてお仕事お仕事ってあれ？アレフ君何するの？

「あなた方恥ずかしくないんですか！勇者ロトの末裔を偽証し、あまつさえそれで得たお金で遊興に走るとは恥を知りなさい。」

「なんだぁお前。なにをガキみたいなことを言ってるんだ。って本当にガキじゃねえか！ガキは帰ってお寝んねの時間ですよ～だ。」

「そうよ！もう少ししたらお姉さんがお相手してあげる。」ちゅっ！

「止めてください。私はこの人達と話をしているのです。」

「うるせえ！こっちはお前なんかとする話はねえな。」

あかん。そろそろ止めないと収拾が付かなくなる。俺は立ちあが

ってアレフの肩をポンと叩く。

「ああ君は正しいがそれだけでは世界は回らない。あとは任せてくれ。」

そして酔っ払い三人に向かって話しかける。

「では改めて、私は勇者査察官ケルテンと申します。勇者ドゥーマン、クロウ、ゲオルグ3名を解任します。尚血の契約において重大な偽証があるゆえ全員に５００Ｇの罰金を申し渡します。意味はわかりますか？」

「なっ！てめえ何言ってやがる。」

「理解できませんでしたか？私は勇者の査察官をしています。つまり私の権限で勇者を解任することができます。ここまではよろしいですね。」

皆静まり返っている。そこの酔っ払いも娼婦達も宿屋の親父、勇者アレフも。

「勇者の解任には次のいずれかの理由が必要です。まず勇者の力量に足りない者、こちらとしても無理に命を失わせるのが目的ではありませんし、支援には限度がありますから弱い者は辞めていただくことになります。次に勇者として器量の足りない者、これは素行の悪い者はモンスターとなんら変わりないと言うことです。勇者の名前の下、軋轢がうまれては意味がありません。そして最後に目的遂行の意思のない者、これにいたっては論外ですね。あなた方はこの三点すべてに当てはまります。」

「異議有り！」

一番弱そうなドゥーマンが何か言い出した。異議有りときたか。ここに至って何を言い出すか面白そうだ。

「俺達はいま酔っ払っているがこれは明日からの活躍に向けて英気を養っているだけで目的遂行の意思がないわけではない。」

「なるほど。続けてください。」

「それに素行が悪いとおっしゃられるがこれは酒による一時の過ち。どうかご甘受願いたい。」

こいつ結構弁がたつな。ローブ姿だから魔法使いタイプか？

「そして力量が足りないとおっしゃられたが試しせずに判断できないのではないのですか？」

なるほど詭弁とは言え、一応反論として成立している。

「わかりました。では力量を試させていただきましょうか。実践形式で結構です。」

「ちょっと待て、今俺達は酔っていてまともに戦えな「かまいません。酔いを醒まさせる方法がないわけではないですから。親父さん、例の特別ジュースを三杯頼みます。」

こいつらの戯言にいつまでも付きあってられるか！こんな嫌な顔を見るのは今日で最後にしたい。

さて目の前に緑色のドロドロした液体が運ばれてくる。これは昔

考案した対酔っ払い用の特別ジュースだ。製法は簡単、毒消し草をすり潰し適当な果汁とシェイクした物だ。アルコールは一種の毒なのである。キアリーを使えばもっと簡単なのだがこの時代には本来無いのでここでは使用しない。

「さあ、ググッと飲み干しちゃってください。私のおごりです。１０分もすれば酒が抜けます。ああまずいのは我慢して下さいね。」

しぶしぶ飲み干す三人。とても不味そうだ。というか実際不味い。親父もカウンター内で苦そうな顔をしている。俺はカウンターに５０Ｇ置く。

「お釣りはいりません。必要経費ですから。」

「では酔いが醒めるまで試験の方法について話しましょうか。何か条件があったら聞きますのでどうぞ。」

「条件って何を？」

「ふう、何も考えていませんか。どんな戦いでも最低限の条件はあります。ルールと言ってもよろしいですね。例えば騎士同士の試合は双方同じ装備同じ人数で魔法無しで行います。一方冒険者ではほとんど決め事はありませんが宿屋の中ではやりません。大事な仕事の斡旋場所ですから暗黙のルールです。」

「じゃあ、俺達はいつも三人で行動している。だからこちらは三人でやる。」

「ＯＫ！それでいい。他には？」

「あんたのその武器はずいぶん立派だ。不公平だ。」

「おい！何勝手なことを言っている。あんたらは三人でさらに武器ま「アレフ君、私の為に怒ってくれなくてもよろしいですよ。その条件もＯＫです。じゃあこれはアレフ君に預けておきましょう。でこれだけでいいですか？」

「じゃあ場所はすぐ外の道路上でいいな。まさか城の兵隊さんは街中で火や雷の魔法をぶっ放したりしないよな。火事にでもなったら大変だ。」

「なるほどその通りです。忠告ありがとうございます。ではギラ、ベギラマは私は使用しません。」

よほど自分たちのとりつけたルールがうれしいのか奴等の顔色がよくなってきた。赤くなったり青くなったり戻ってみたり顔色だけで忙しいやつらだ。

「おい、本当に大丈夫か。必要なら城に行って騎士を呼んでくるが。」

「心配ないよ、親父さん。まあ見てなって。」

３０分後、３対１　さらに不公平なルールの試合が始まる。

## 決闘

ガヤガヤ　ガヤガヤ　ガヤガヤ　ガヤガヤ・・・・・・
いつの間にか宿屋のまわりは人であふれている。いったい何がおきた？窓からこっそり外を覗く。

「偽勇者三人相手に城の兵隊さんが喧嘩売ったってよ！」
「いや勇者は本物で兵隊が因縁つけたって俺は聞いている。」
「え～賭け金は１Ｇから、今の所オッズは勇者三人が１．５に兵隊が３、おいだれか兵隊にかけるやついないのか！賭けにならないぞ。よし兵隊のオッズは５だ。だれかいないか？」

いつのまにか祭りの会場になっている。屋台でもでてこれば完璧だな。

「大事になってすまない。うちのおんなどもが外に触れ回ったらしい。最近景気のいい話がなかったから皆話題に餓えていたらしい。なんなら今からでも止めさせるが・・・」

「あ～・・え～・・まあしょうがないかぁ。いや今更止めれる状況じゃなさそうだ。場所だけ確保してくれるかな、半径１０ｍくらいでいいから。」

「うちの前では狭いな。若い者に中央の広場を確保させる。しかしお前さんにはつくづく悪いことした。すまない。」

「別に親父さんが悪いわけじゃない。もう謝らないでいいよ。こっちが悪い気がしてくる。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー

　時と場所を移すこと　ラダトーム城下中央広場　二時間後、完璧な祭りの会場が出来上がっている。急遽用意された屋台、ロープと簡易な木で作られた１０ｍ四方の闘技場。山のような人、人、人。もう１０時は回っていて本来なら真っ暗なはず・・・誰だよわざわざレミーラで照明作ったのは。

「え～それではこれより自称勇者三名とラダトーム城兵士の決闘を行います。ルールは双方の申し出より決定しています。勇者側は三人パーティー武器魔法など制限無し、兵士は武器無しギラ、ベギラマ使用禁止となっています。」

　宿屋の親父が立会い人兼司会者となってアナウンスする。

「おい！なんだそれ。勝負にならねえよ！！！賭けるの止めるぞ！」
「え～条件が変わっても掛け金の返金はしません。このまま続行します。なおオッズは１．２対１０に変更します。」

　さてとそろそろ登場するとしますか。モシャスとか使っちゃ駄目かな。あまり個人として目立ちたくないし、いや駄目だなもう手遅れだ、あきらめるか。
　俺がとことこと広場にでていく。そのあと自称勇者三人が出て行く。騒ぎが余計にはげしくなった。

　そうだろうね、俺一見強そうに見えないから。身の丈１７０ｃｍ、筋肉は付いているが細身、顔も普通、しかも武器なし革の服のみ、これが俺の今のスペック。かたや対する三人はゲオルグ身長１９０弱、結構ごつい体をしている。銅の剣、革の盾、布の服で強そうに見えるな。クロウ身長は俺と変わらないが俺より肉付きはいいよう

だ。こん棒に布の服。多分三人の中で一番劣る。最後にドゥーマン身長170弱俺より細身ローブ姿で木の杖を持っている。どこから見ても魔法使いだ。大体の戦法は想像できるな。さてどうでるかな？とりあえず準備しよう。まずピオリムを二回かける。バイキルトはいらないか・・・スカラは念の為かけておくか。魔法対策にマホカンタでも使いたいが却下だ。あれは派手に効果がありすぎる。ロストマジックは使用がばれたくない。こんなもんでいいだろう。

「最後にこの決闘において故意に命を奪わぬこと、後に遺恨を残さぬこと、双方精霊ルビスの名の下遵守されること。ここにいる全ての者が見届ける。それでは始め！」

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーー

ゲオルグ（剣）

俺　　　　ドゥーマン（魔）

クロウ（こん棒）

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーー

　予想通りの布陣だ。ゲオルグとクロウが互いに目配せしている。そしてちらちらとドゥーマンの方を見ている。積極的に前に出てくるやつはいない。近接二人で俺を引き付け後ろからギラで一撃、基本だな。

「おいせっかく三人もいるんだ。そっちから仕掛けてきな。」

わざと挑発するように手を振る。動け！形が崩れないと攻め手がない。

安っぽい挑発だが効果があったようだ。クロウのこめかみがピクピクしている。

「この野郎！」

クロウが一歩踏み込み、こん棒を振り上げた。

そこっ！すばやさ２５５は伊達じゃない。俺は一足跳びにクロウの懐に飛び込み、こん棒を振り下ろす右手と襟をつかんだ。

「ギラッ！」

あせったドゥーマンがギラを放つ。俺はそのままクロウをドゥーマン側に背負い投げる。あえて叩きつけずに放り投げる。火の球が空中で逆さまになったクロウの背中を焼く。

「ぎゃぁぁぁ～！！！ぐふっ！」

地面に落ちてのた打ち回るクロウに近づき頭にサッカーボールキック。一つ！次二人目、ドゥーマン側に走る。先程と同じように踏み込む。

「ひぃぃ～」

ドゥーマンが頭を抱え込んでしゃがみこんだ。おいおい俺がいじめてるみたいじゃないか。しょうがない。

「寝ろ！ラリホー。」

ここまで多分二息。見ている者には一瞬で戦局が一変しただろう。静まり返っていた場が騒がしくなる。

ウワァァァァァーー！！！

俺はゆっくりとゲオルグに向かって振り返る。ゆらぁっ～とでも不気味な効果音が聞こえていたらベストだ。

「さて残るはお前だけだ。続けるか？止めるなら今のうちだぞ。」

「なめるな！」

ゲオルグが激高し銅の剣を振り回す。袈裟斬り、右薙ぎ払い、左横払い、突き。機からみると猛攻に見えるかもしれない。固唾を呑んで観衆が見守る

ピオリム。この呪文は最大ですばやさを１．５にする。しかし体が速くなっても意識は付いてこないし、慣性や重力は普段と変わらず発揮する。この状態になれるため結構無理な修行を詰んだ俺にとってこんな大振り見切るのは造作もない。しかし革の盾が邪魔になって懐に飛び込みにくい。いったん距離を置こうとバックステップ。ズルッ！踏ん張りが利かず片膝をつく。やばい！

「馬鹿め！もらったぁぁぁ！！！」

上段からの真っ向から竹割り。

「キャーーーー！」

観客の悲鳴があがった。そして静まり返る観衆。最悪の終わりが想像される。そこには銅の剣を両手のひらで挟み受け止めている俺がいた。真剣白刃取り。よく取れたものだ。俺は我にかえり腕をひねり武器を奪い取る。呆然としているゲオルグの腹を蹴飛ばし倒す。

「終わりだな。」

銅の剣を突きつけ宣言する。

「そこまで！」

観衆の歓声は最高潮に達した。多分ここにいるとやばい状況になると思われるので退散するとしよう。手にしていた銅の剣を放り出す。あ～うるさい。耳をおさえながら歩く。

「アレフ君。私の刀を返してください。」

アレフの耳のそばで大声で叫ぶ。

「えっああ！はい、これどうぞ。」

唖然としていたアレフが我に返り刀を差し出した。

「ありがとう。また会いましょう！」

俺は群集にまぎれるように姿を消した。

## 決闘の反響

う～ん、よく寝た。もう6時か、あれだけ身も心も疲れてたわりには起床時間は変わらないとは習慣とは恐ろしいな。うわっ手の平が痛い。昨日銅の剣を受け止めた所が青くなっている。やっぱり無茶だったようだな。銅の剣で助かったようだ、鉄の剣や鋼の剣だったら・・・もうあんなまね止めよう。手足が何本あっても足りん。とりあえず治療しておこう。

「ホイミ」

うんホイミは便利だ。多少の切り傷、打ち身、筋肉痛にも効く万能魔法だ。一人ぶつぶつ言っているとノックの音が聞こえる。

「ケルテン殿起きていらっしゃいますか。来客ですが。」

誰だよ、朝っぱらから。扉を開けると騎士見習いの一人が立っている。

「はいはい。起きてますよ。で来客ってどちら様ですか？私しか駄目なんですか？」

「はい名指しです。しかも勇者殿です。」

昨日の連中がクレーマーにでもなったか？そうだったら嫌だな。他には心当たりないし・・・。

「ではすぐ行きますので、応接室に通しておいて下さい。」

「わかりました。そう手配します。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ラダトーム城兵士宿舎　談話室

談話室は非常に重苦しい空気に包まれている。ここにいるのは俺と勇者アレフの二人だけだ。この空気を作った張本人は真剣な目を俺を見つめている。先程開口一番

「私を弟子にして下さい。」

ときたもんだ。それから5分ほどずっと沈黙が続いている。俺はさっきから考えているのだが考えがまとまらない。個人的に一人の勇者についていいものか？俺に何か教えることができるのか。俺自体何人かに師事したが基本独学で覚えたことの方が多い。そもそも俺に何を支持しにきたのか？昨日初めて会ったから昨日の決闘に何か感じる物があったのか？さっぱりわからん。

「ゴメン。よくわからないのだが何を師事するつもり？」

「全部です。必要なら武器も変えます。魔法もできる限り覚えます。」

「ああそれ駄目ね。いくら私の真似しても強くはなれない。今持ってる技術を昇華させるようなことをしないといけないよ。私と君は同じじゃないから。」

「それです。」

「えっ何が？」

「そういう考え方です。私にはそういう何かが足りません。孤児だった私は生きる為に武器を振っていました。更に必要なので魔法もかじりました。一応ホイミ、ギラは使えます。でも何か足りないのです。昨日の決闘をみてこの人だと思いました。」

なるほどね。必死で生きてきたんだ。よく曲がらずにいたものだ。

「ＯＫ。わかった。でもさっきも言ったように一から十は教えない。君が持ってる三なり五なりを十に近づける。そういう方法を教える。それでもいいか？」

「はい！それでかまいません。師匠。」

「ああ、それも駄目。俺にはケルテンという名がちゃんとある。肩書きとかで呼ばれると俺が俺で無くなった気がする。だったら俺も君のことを勇者５５で呼ぶよ。」

「勇者５５？」

「知るわけないか。君は五月の五番目に申請してきた勇者と城では認識している。失礼な話だろう。」

「では昨日の三人も？」

「そう、かれらは勇者５２、５３、５４だった。んっ？あれっ俺正式に解任してない。また探さないといけないか。まあいい、それは置いといて俺のことはケルテンと呼んでくれ。」

「わかりました。では私のこともアレフと呼んでください。この大

地の名を頂いた大事な名前です。ケルテン師匠。」

「わかった、アレフ。今からお前は俺の弟子だ。ではまず技量がみたいから訓練場に行ってくれるか。案内はさせる。」

そして騎士見習いを呼んで案内をさせる。俺は自室に戻り自分の刀を佩き、アレフに使わせる鉄の剣と鉄の盾を持つ。これは支給品だが使っていない物だ。実は鉄の剣は市販では売っていない。正規兵の武器である為一般には販売が禁止されている。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

兵舎訓練所　ラダトーム城の兵士は特に訓練義務があるわけではないが、一般的にここを使用して自己鍛錬を行なう。俺は毎朝一時間半ほど刀を振っている。

さてアレフと騎士見習いの二人がいる。とりあえず重いので鉄の剣と盾は置いておく。

「あ~君、名前は？」

「はっ！ジョルジュといいます。」

「そんなに緊張しなくていいよ。じゃあジョルジョ、アレフと木剣と木盾で模擬戦をやってもらう。双方手加減はいらない。もちろん攻撃は当てること。とりあえず三本勝負でいいかな？」

今目の前で模擬戦をやっている。ジョルジョ君は流石騎士見習いらしく正当な剣術を使う。基本に忠実でフェイントの使い方も教科書通りうまいもんだ。だがまだ体ができていないからまだ剣筋が甘

い。嗚呼そういえば不思議なのがサイモンだ。昔初めての模擬戦やった時、片手剣に盾を持つ正統スタイルでヤクザキックかましてきた。同じ剣術とは思えんな。いかん考えがよそに行った。さてアレフは型がない。ちからもすばやさも相手より上だから通用しているだけだがまだまだ可能性はありそうだ。三本勝負の結果は、アレフ二本、ジョルジュ一本だ。

「さて先に品評をしておこうか。
まずジョルジュ君。君はそのままでいい。ただフェイントに固執しすぎじゃないかな。たまには気合の一撃を入れるといい。それでフェイントが生きる。
次アレフ、君は身体能力に頼りすぎ。多分格下には強いが格上には通用しない。とりあえず基本の剣筋を確立しようか。よし大体やるべきことはわかった。ジュルジュ君ありがとう。もう戻っていいよ。またあいてをしてやってくれ。」

先程放り出しておいた鉄の剣と盾をとってアレフに渡す。

「まず先に行っておくが、理解できないことがあったら必ず質問すること。理解しないまま訓練しても身につかないから。また納得できないならいつ師事することを止めてもかまわない。ただしその場合は必ず口で言ってくれ。いいな。」

「わかりました。でも師事を止めるなんてありません。絶対に。」

「よし、練習だけだがその剣と盾を使ってくれ。やっぱり本物を使わないといけない。とりあえずそれを持って構えてくれ。」

アレフは右手の剣を少し掲げ、左手の盾を前に出す。左の軸足を少し前に出し、かるく腰を落とした構えをとる。悪くない構えだ。

「それがいつもの構えか？」

「はい。何かおかしいですか？」

「いや別におかしなことはないよ。その状態をホームポジションと言うことにする。」

「ホームポジション？」

「ああ気にしなくていい。ではそこの木偶を思いっきり斬りつけてくれ。」

木偶とは直径１０ｃｍぐらいの木を十字に組んでそれに麦わらを巻きつけた物。必要ならここに甲冑を着けて使う。アレフは剣を思いっきり叩きつける。剣は振り下ろしたままだ。

「はいそれ駄目。攻撃の後は必ずホームポジションに戻す。」

「あっ！でもなんで？」

「まだ敵は倒れていないかもしれない。だから次に備えた姿勢に戻す。じゃあ次は木偶の無い所で素振りをしてくれ。ただしさっきと同じ威力のままで。」

アレフは思いっきり剣を振り下ろし、ホームポジションに戻す。そしてこちらをむいて笑う。

「そうだ、それでいい。では次はその一連の動作を１００回繰り返す。」

これが結構大変だ。見ていると半分位から振り下ろしが甘く、ホームポジションへの戻りも不正確だ。
一応終わった後、肩で息をしている。

「結構きついだろう。まずこれができるまで他のことはしなくていい。最終的にこれを1分の休憩を挟んで１０セットできるようになってもらう。腕が動かなくなったらホイミを使うといい。」

「でもこんなので強くなれますか？」

「これはそれ以前の問題。さっきのジョルジョもこれに近いことをやってるはず。ちなみに」

俺は刀を中段に構え、一瞬の振り上げの後振り下ろす。そして中段に構えなおす。これを１００回繰り返す。これだけやって息もきれないしおよそ3分で終わる。

「俺のはこんな感じだ。１０年毎日やっている。まあ一週間でこれぐらいはできてほしいかな。午前中はここを使っていい。午後からはモンスターを狩ってくること。弱いモンスターでもいいから基本を抑えながら戦うこと。ついでにお金も稼ぐこと。では俺も日課の続きをするからアレフも続けるように。」

俺はいつもどおり刀を振る。振っている間は他の事は何も考えない。目の前にいるイメージを斬る。ここ一ヶ月の仮想的は近衛隊長である。１０セットが終わったら次の型に移る。自然体から居合い逆袈裟切り、振りかぶって両手持ちで幹竹割り、納刀の一連の流れを１００本、１０セット行なう。ふと我にかえると隣でアレフがあっけにとられている。

「おいおい、手が止まってるぞ。」

「すみません。なんかすごくて。」

「毎朝ここにいるから、そのときだけ教えてやる。じゃあ俺は終わったからあとは自分で続けること。剣と盾は終わったらその辺の見習いに返しておいて。」

言うだけ言うと俺は練習場を立ち去った。今日はやることがいっぱいあるからあまり付き合ってやれない。昨日の連中を解任しなくてはならないし、賠償金の支払い手続きもいる。さらに勇者５１はどこへ行ったのか気になる。今日も忙しくなりそうだ。

## 祭りの後と後の祭り

いつも通り食堂で朝食をとる。いきなりの運命の変転に気が滅入る。無意識にフォークで肉や野菜をつついている。誰は来たようだな。

「ケルテン師匠、ここにおいででしたか？」

サイモンが冷やかすように言う。

「てめえ！なんでそれを。」

「くっくっく！ジョルジョから聞いた。私もよい助言を頂きましたって喜んで皆に触れ回ってたぜ。」

頭を抱える。なんだよ、他に娯楽はないのかよ。俺で遊ばないでくれ。

「それともう一つ。」

そういいながらサイモンが袋をテーブルにドンッと置いた。何が入っているんだ？結構重そうだ。。

「いや～昨晩は儲かった、儲かった！なんせ１０倍の鉄板レース。」

サイモンが袋をひっくりかえして中のゴールドをテーブルにぶちまける。食堂にいた連中が寄ってくる。

「あ・あ・あ～お前・・・これ！」

俺は声にならない声を出して、ゴールドの山を指差す。１０００Ｇどころじゃない。その倍はあるか？

「昨日の夜な酒でも飲もうと城下に出たら祭りやっててな。でな！主催の決闘の賭けに有り金全部お前に賭けた。ああいうのって普通掛け金に限度額あるだろ！でもお前の無茶な条件にお前に賭けるやつがほとんどいなくて、胴元がお前に限り限度無しでのってきた。いや～お前格好よかったよ。」

もういい。もういいよ。お前、俺をおもちゃにして喜んでるな。

「よお～し、今日は全部俺のおごりだ。皆ここでなら何食ってもいいぜ！」

そして朝から酒宴が始まった。

「ケルテンに！」
「サイモンに！」
『かんぱ～い』「乾杯」「乾杯」・・・・・・・・・・

俺はこの馬鹿騒ぎに巻き込まれないよう逃げ出した。逃げてばっかいるな、俺。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

あいつら呪ってやる。大臣と隊長にたっぷり叱られるがいい。俺はぶつぶつ言いながら街中を歩く。見事なまでに人が俺を避けていく。きっと怖い顔しているのだろう。それはまあどうでもいいとし

て、目的地は昨日の宿屋である。あの連中がいればいいし、いなくても手がかりくらいはあるだろう。はたして・・・？

結論。連中は宿屋の一室に篭っていた。あの後ここに逃げ込んだはいいが、外の喧騒に一歩も出ることができなくなったらしい。三人とも目の下に隈ができている。眠れなかったのだろう。

「なんだよ。負け犬を笑いに来たのか。強い強い兵隊さんよ！」

「強いってのは気分がいいんだろうな。やる前から俺達のことを馬鹿にしていたのだろう？」

「５００Ｇなんて払えねえぜ。ないもんなないからな。」

なるほど。いじめられて拗ねてる状態だ。強くも出られず、かといって逃げるに逃げれないから開き直ったか？

「まあ馬鹿にしていなかったと言ったら嘘になるな。だが事終わった後笑いに来る趣味は無い。だがやることはやらないと俺が大臣に怒られる。」

ここで言葉を止める。かなり心配そうな顔をしている。

「まず昨日の通り勇者は解任させてもらう。それと賠償金５００Ｇだが今すぐ払うのは無理なのは分かっているから、モンスター素材の優先買取の権利だけは取り消さずこれを持って支払ってもらう。」

「嫌だといったら？」

「ああその場合はもっと簡単だ。王様に対する詐欺ということで死刑だ。逃げても無駄だぞ。あの血の契約でどこに逃げても居場所が分かる。だから逃げるのあきらめろ。俺も追うのは面倒くさい。」

「わかった。死刑になるのは嫌だ。だろっ？」

残る二人に同意を求める。当然縦に首が振られる。

「よし、では詳しいことをつめようか。買取金額のうち半分は即賠償金としてもらう。残る半分は自由に使っていい。その金で余分に賠償金を払おうが、生活費や装備などに使用するのも自由だ。最高で三人で３０００Ｇ相当の素材を買い取ることができるな。」

「えらい段取りがいいな？もしかして最初から決定事項か？」

「そうかなり悪辣な罠だよ。大臣に聞いたときもそう思った。まあ高い授業料と思うんだな。」

三人がため息をついてうなだれる。

「あと一ヶ月に一度は報告に来てくれ。もし遠征で一週間以上連絡が取れなくなる予定がある場合も事前に相談してくれ。具体的に言うと徒歩ならガライは３日、マイラは５日、リムルダールなら２週間はかかる。例えばリムルダール近郊にいるゴールドマンなら１体で１０００Ｇになるが・・・」

ここで三人の顔を見る。

「なあ、人の顔を値踏みするように見ないでくれ。」

「いや悪気があるわけじゃない。どの程度までならいけるか考えていた。」

「で、俺達にいけそうなのはどこまでだ？」

「そうだな。二、三日はラダトーム近郊で遠征費用を稼ぐ。その後ガライへの遠征で野営に慣れるべきだな。あとはガライから帰ってきてから相談だな。」

このとき三人は呆れたような顔で俺を見つめていた。

「何？顔に何かついているか？」

「あんた自分が何言ってるか分かってるのか？その見識と自信はどこからでてくる？むしろあんたが勇者だって名乗りでてもいいぐらいだ！いや今からでもそうするべきだ。」

あれっそう言われりゃそうだ。自分が異分子だと判断して大きく世界に関わらないようにしてきたし、自分は勇者じゃないと思ってたから・・・。

「まあ俺のことは置いといて、君らの話を続けよう。さっきも言ったようにガライに行って帰ってこれるようになってくれ。いいな。」

「はあ。最初からあんたに会えてればよかったのに。そうすればこんなことにはならなかったのに。」

「なあ俺らはどうしていればよかったんだ？教えてくれよ。」

しばらく考える。こいつらはもともと銅の剣、こん棒、布の服３着、革の盾を持っていた。で前衛２、後衛１・・・ならば俺ならこうする。

「そうだな。まずもらった３００Ｇで革の鎧を２着買う。ゲオルと

クロウの分だ。あとクロウに革の盾を一つ買う。これで残金は７０Ｇだ。ここまでやって残りで遊興にいそしめばよかった。最低でも翌日からの意思が表明できた。あと革の鎧だったら俺には投げられていない。襟がつかめないからな。じゃあ俺は次の予定があるからまたな。」

部屋をでて俺は外に向かう。物分りのいい連中でよかった。もっとごねてくるかと思った。次は勇者５１ことガルドだ。大臣の執務室で調べるかな。

## 美女と魔法談義

大臣の執務室だ。簡単に昨日の結末と後始末について大臣に説明する。さして興味もなさそうに大臣はいった。

「それについてはそれでよい。であとの二人は有望か？」

「分かりません。ただ内一名が私に師事してまいりましたので許可してしまいましたが、よろしかったですか？」

「かまわぬ些細なことだ。だが役に立たないと判断したなら速やかに放逐せよ。」

相変わらず大臣はある程度の身分以下の人間にたいして厳しい。選民意識の強い人だ。個人的には好きではないが国務大臣ともなると、いちいち下々のことなど気にもかけぬのも当たり前か。

「では残る勇者５１について調べます。」

抽斗から勇者５１ことガルドの書類をだす。書類に右手、水晶球に左手を置き魔力を送り込む。地図上の光点の一つがより強く光り、水晶球に歩く姿が映し出される。場所は・・・ここと マイラの中間ぐらいか。

徒歩にしては脚が速いな。問題は今の所無しか。

「では失礼します。」

退室する俺に大臣は一瞥すらしない。

――――――

「俺がここに来なくなるなんて無いよ。まだ読んでいない本がいっぱいあるしね。」

俺がこの城に来た最大の理由がここにある。この図書館には門外不出の文献がいっぱいある。ロトの洞窟、雨の祠、虹の祠（雨と虹の祠は単独で存在しておらず小集落に祠があった。）などのロトの足跡を追い始めたのは5年ほど前、存在していたはずの技術を捜し求めた。その集大成がここにあった。

「わたしは？」

マギーは怒ったように言う。

「いや君に会えるのもうれしい。また魔法談義ができるし。」

そう俺が気に入られているのはその一点に尽きる。彼女は二言目には『かつて魔法使いは天を地を人を思うように操れたはず。』と言って今の魔法に満足していない。

「じゃあその魔法談義で許してあげる。」

「ＯＫ！じゃあ準備するからそこで待ってて。できれば飲み物を用意してほしいな。」

図書館を歩き回って幾つかの本を持ってテーブルに付く。マギーは不器用にお茶を入れている。大体いつもの通りだ。

「じゃあ始めようか。今日は俺の推察したことについてだ。

まず第一にギラはギラじゃない。さらにベギラマはベギラマでは

ない。意味分かる？」

「わかんない。ギラはギラでしょ？」

「そうだろうね。俺も同じこと聞いたらそう答える。じゃあこれ見て。」

俺は本を取って挿絵のあるページを開く。挿絵にはギラを使う魔法使いと説明書きがある。また別の本を取って開く。こちらにはの魔法の説明がある。

「これが何？ギラの説明でしょ？」

「この絵をよく見て、ギラで大地を焼き払ってるだろ。」

「そうとも見えるね。」

「じゃあ、君のギラで同じ事できる？」

「無理ね。火球が出るだけ、こんな風に焼き払うことはできない。」

「次，ここにある記述”ベギラマはギラの上位魔法である。”これについて、さてベギラマはギラの上位魔法か？」

この質問にマギーは首をかしげる。斜め右上を見上げながら何か考えている顔はとても美しい。

「そうね。そういえばおかしいわね。ギラは火球の魔法、ベギラマは稲妻の魔法。全然違う。」

俺はさもこの文献で解かったかのように説明する。ただ事実を述べているにすぎないのだが、この時代のギラは実はメラである。同じようにベギラマはなんとライデインである。この事実に気づいたとき俺は失われた魔法を再現できる可能性にも気づいた。今それを始めて他人に洩らしている。

「次に魔法の詠唱内容について、これは今意味の解からない言葉を丸暗記して詠唱している。そうだよね？」

「そうよ。はるか昔ロトの勇者一行から教えられた魔法は口伝のみね。」

「俺の考えでは当時アレフガルドには魔法技術が低かったと思っている。そこにそれらを自由に操る大魔王たちがこの地を征服した。そして同じく魔法を駆使できる勇者が光臨して大魔王を倒した。このとき少しの魔法が伝授された。」

「だめよ！その名前を口にしてはいけない。」

「なにが？大魔王のこと？本当の名前も知らないのに！」

「やめて！呪いが・・・何か悪いことがおこるかもしれないじゃない。」

「わかった。その名はもう口にしない。俺が悪かった。」

今現在、大魔王ゾーマの名は伝わっていない。大魔王と口にすることすら禁忌とされている。口にすることで蘇るかもしれないと無意識に恐れられている。

「話が逸れたね。考察を続けよう。魔法の詠唱文の一小節目についてギラ、ラリホー、マホトーン、トヘロスこの４つは同じ。ではこれらの共通点は？」

またマギーが首をかしげている。この顔が見たくて俺は毎日のように魔法談義をしているようなものだ。

「わかった。消費するＭＰだ。数値化はされていないが消耗が近い。」

「正解！まだ魔法を覚えたての頃やらなかったか？自分はホイミを一日に何回使えるか？ギラなら？ラリホーではって。」

「やったわ。最初ホイミは２回しか使えなかった。でもギラは４回使えたわ。ホイミが３回使えるように成ったらギラは６回使えるようになった。ホイミはギラの２倍疲れるって言ったら大人が驚いてた。」

「またまた正解。ちなみに具体的に数値化すると俺数値だがホイミは４ＭＰ、ギラ、ラリホー、マホトーン、トヘロスは２ＭＰ、レミーラは３ＭＰ、リレミトは６ＭＰ、ルーラは８ＭＰ、ベホイミは１０ＭＰ、ベギラマが５ＭＰだ。」

「ちょっと待って、記述が間に合わない。もう！ここに書いて。」

「了解。じゃあその共通する３ＭＰという部分が詠唱する文節にあるか？」

俺はさっきの消費ＭＰを紙に書きながら質問する。またマギーは俺が好きな顔で考えている。

「うん。あるわね。」

マギーの目が輝いている。ちょっと俺は意地悪をする。

「さて、じゃあ俺から質問。今俺が答えを持っているとする。君はその答えを知りたいか？」

「駄目！そんなカンニングみたいなことしたくない。」

「ＯＫ！じゃあヒントをあげよう。詠唱２小節目３小節目は全ての魔法で一致する。さてこれはいかに？」

「もういいわ。自分で解明してみる。時間はあるから。」

この勝気な感じもたまらないな。多分答えを教えたら二度と口をきいてくれないだろう。手元の紙に詠唱文をかきながらうんうんうんうなってる。俺も昔やったな。口述するのが日本語だとしたら、詠唱は英語みたいなものだ。意味が分からないから片仮名で詠唱する。口伝なので発音の仕方も習う。元々ロトは外国人みたいなものだから言葉も苦労しただろうし、魔法に使われる特殊言語に至っては説明するのは不可能だったに違いない。数ある魔法の詠唱文の解読は大変だったな。数ある魔法・・・そういえば開かずの間・・・あっできるかもしれない。

「そうだ。例の開かずの間、試してみていいかな。」

「はあ？あんた何言ってんの！昔から該当する鍵も見つからないし、有名な鍵師でも開けれないゆえに開かずの間なのよ！」

ここには開かずの間がある。ロトの時代より一切開けられていない開かずの間。鍵も無く万能鍵である魔法の鍵でも開かないから放置されている。その前には古い箱などが詰まれていて無いものとされている。

「やってみたいことができた。もし開いたら報告する？」

「う～ん・・・しない。ここが騒がしくなるのは嫌！馬鹿が増える。」

「だよね。報告の義務はないし。じゃあ荷物をどけようか。」

小一時間埃まみれになって荷物をどけた。

「もう！埃まみれ。これで開かなかったら荷物は自分で戻してね。」

「分かった。でも開いたら戻すのは手伝ってくれるってことだよね？」

「うっ！そう来る？いいわ！それでいい。」

扉の前に立って鍵穴を確認する。魔法の鍵にあう大きさよりずっと小さい。しかもやたら複雑な形をしている。いけそうだ。鍵を探していたから開かないのだ。閉めたのはロトに違いない。ということは閉めた鍵は最後の鍵、じゃあそれがないなら、詠唱開錠魔法・・・

「アバカムッ！」

カチッ！シリンダーが４００年ぶりに音をたてる。

「何？今の魔法。」

「ロストマジックの一つ開錠魔法アバカム。教えて欲しい？」

「意地悪ね。でもまだ駄目、私じゃあまだ早い。」

「君の意見を尊重するよ。じゃあ入ってみようか？」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1157y/

勇者って一人じゃないんですか？

2011年11月5日02時07分発行